小・中学校

平成9年度

教育研究員研究報告書

書　　写

東京都教育委員会

平成９年度

教育研究員名簿（書写）

書　写	地　区	学　校　名	氏　　名
	港	三光小学校	山本伸子
	新宿	東戸山小学校	吉川明子
	中野	若宮小学校	西川さやか
	豊島	富士見台小学校	小林修代
	板橋	上板橋第四小学校	髙室万智子
	練馬	下石神井小学校	佐々木美津代
◎	江戸川	東小松川小学校	土上智子
	墨田	竪川中学校	栗生忠義
○	渋谷	本町中学校	永野裕子
	保谷	ひばりが丘中学校	河西敦子

◎＝世話人　　○＝副世話人

担当　教育庁指導部指導企画課指導主事　宮崎活志
笠原慎太郎

目　　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 …… 1

Ⅱ　研究の構想
1　研究の基本的な考え方 …… 1
2　研究の全体構想図 …… 2

Ⅲ　研究の内容 …… 4
＜基礎的・基本的事項＞ …… 8

Ⅳ　実践事例
＜小学校第４学年＞ …… 9
＜小学校第５学年＞ …… 14
＜中学校第１学年＞ …… 19

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題 …… 24

研究主題　**基礎・基本を身に付け活用できる書写指導の工夫**

Ⅰ　研究主題設定の理由

様々な情報が氾濫する現代社会においては、それらを適切に判断して取捨選択し、自分の生活に生かせるようにすることが大切である。また、価値観が多様化するなか、個性を生かすために、豊かな表現力が必要とされている。

一方、国語科書写においては、目的や意図に応じて適切に表現するための言語活動の基本的な力を養うという役割を担っている。文字を正しく整えて書けることは、生涯にわたり、自信をもって自己表現できる手段の一つとなり得るのである。

本部会の意識調査によれば、児童・生徒は文字を書くことが好きであり正しく整った文字を書けるようにしたいという願いをもっている。小学校低学年では新しい文字と出会うことに喜びを感じ、中学年・高学年では褒められたい、認められたいという気持ちが強くなり、適時、適切に評価されることが書く意欲へとつながっている。中学校においては、日常生活で使用する文字の多くは手書きがふさわしいと考えていることも読み取ることができた。

その反面、小学校低学年では文字を書くことに興味をもち意欲的に取り組めたのが、学年が進むにつれ自他を比較し、技能の差を認識するようになり、苦手意識をもつ児童・生徒が増えてくる。その原因は、基礎・基本が身に付いていかないことや評価が文字の巧拙といった印象を規準として行われることが多く、児童・生徒が成就感を得られないためであると考えられる。

そこでまず、書写の指導に対する教師の意識を変えていく必要がある。毛筆指導は、硬筆の文字を分かりやすく指導するための基礎であり、毛筆の作品を仕上げることが目的ではない。書写で学んだことを日常生活に生かしていくことが重要である。また、児童・生徒が基礎・基本を身に付けられるよう指導の工夫をしていくことも必要である。

以上のことから本年度は「自分で課題を見つけようとする児童・生徒」「文字の基準を正しく理解しようとする児童・生徒」「自分の課題に向け努力し解決しようとする児童・生徒」「学んだことを日常生活に生かそうとする児童・生徒」を目指し、本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究の構想

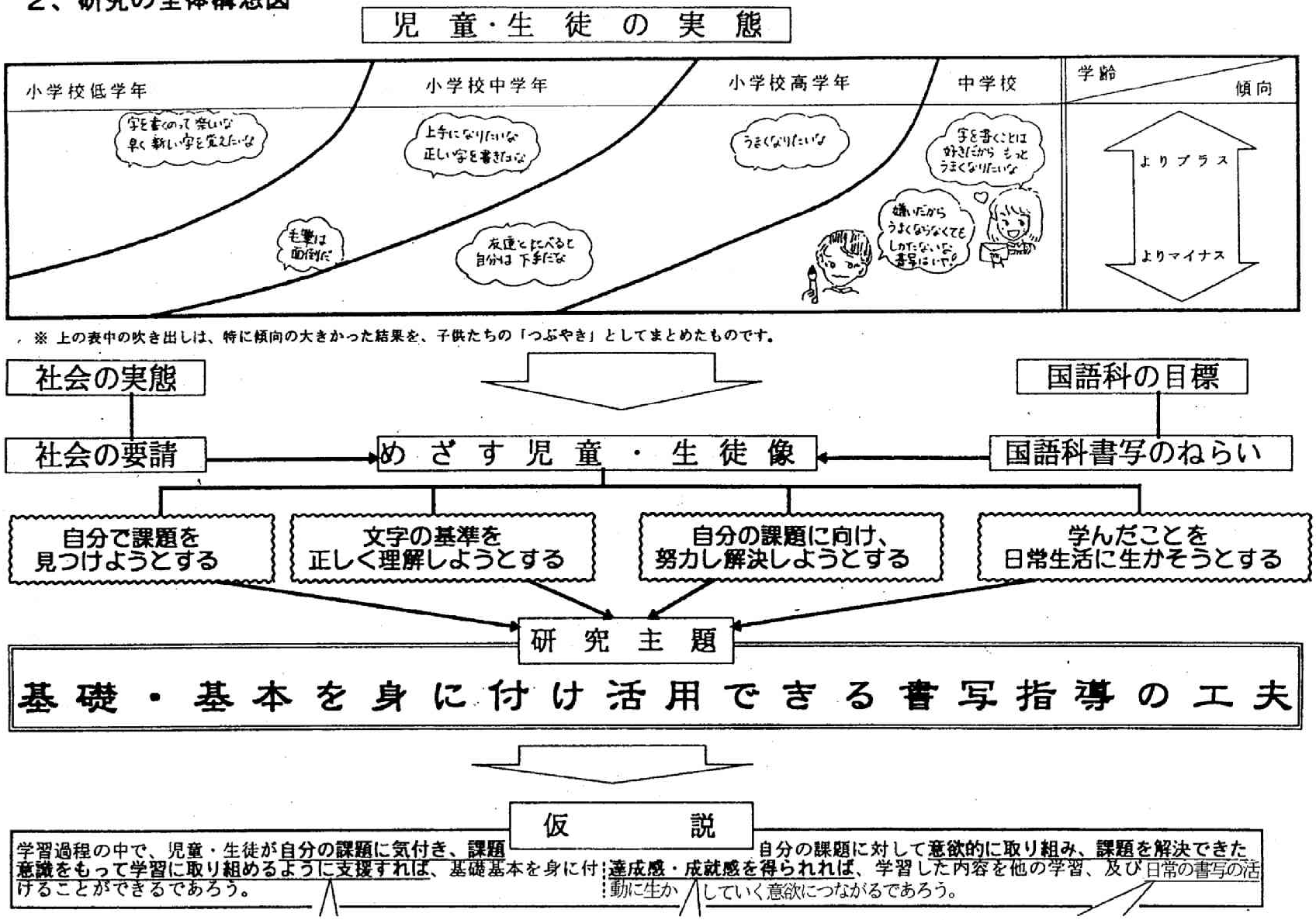
1　研究の基本的な考え方

基礎・基本を身に付けるようにするためには、まず発達段階に応じた基礎・基本を明らかにし、定着できるよう指導の手立てを工夫する必要がある。さらに、学習過程において児童・生徒が自分の課題に気付くとともに、自ら課題意識をもって学習に取り組むことができる力をつけられるよう支援していくことも大切であると考えた。

また、自分の課題に対して意欲的に取り組めるような学習活動や評価を工夫し、児童・生徒が自分の力で課題を解決できるようにすれば、達成感・成就感が得られると考えた。児童・生徒が書くことに対し喜びや自信をもつことができれば、日常の書写活動に生かそうという意欲につながる。

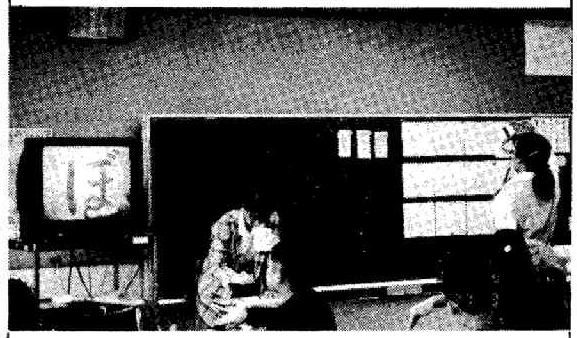
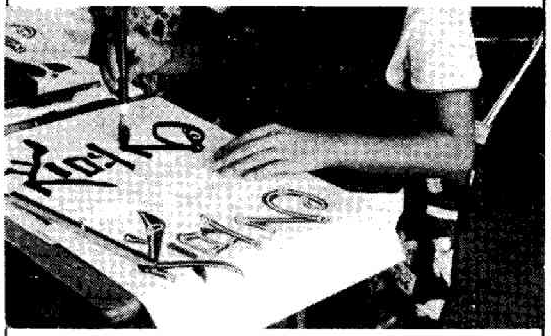
以上のことについて、授業研究を通して研究を進めることにした。

2、研究の全体構想図


児童・生徒の実態
小学校低学年
小学校中学年
小学校高学年
中学校
学齢
傾向
字を書くのって楽しいな 早く新しい字を覚えたいな
上手になりたいな 正しい字を書きたいな
うまくなりたいな
字を書くことは好きだから もっとうまくなりたいな
毛筆は面倒だ
友達とくらべると自分は下手だな
嫌いだからうまくならなくてもしかたないな 書写はいや!
よりプラス
よりマイナス
※ 上の表中の吹き出しは、特に傾向の大きかった結果を、子供たちの「つぶやき」としてまとめたものです。
社会の実態
国語科の目標
社会の要請
めざす児童・生徒像
国語科書写のねらい
自分で課題を見つけようとする
文字の基準を正しく理解しようとする
自分の課題に向け、努力し解決しようとする
学んだことを日常生活に生かそうとする
研究主題
基礎・基本を身に付け活用できる書写指導の工夫
仮説
学習過程の中で、児童・生徒が自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組めるように支援すれば、基礎基本を身に付けることができるであろう。
自分の課題に対して意欲的に取り組み、課題を解決できた達成感・成就感を得られれば、学習した内容を他の学習、及び日常の書写の活動に生かしていく意欲につながるであろう。

自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組むための工夫	意欲的に取り組み、達成感・成就感を得るための工夫	日常生活に生かすための工夫
・興味・関心を高める導入の工夫 ・教材や基準をわかりやすく提示する工夫（教材提示装置、二色筆、「すけーるシート」、拡大文字など） ・課題に気付かせるための工夫（シール、「すけーるシート」、学習カードなど） ・課題意識を高めるための工夫（練習用紙、学習カードなど） ・評価の工夫	・個々の課題に応じるための工夫 ・指導計画の工夫 ・学習形態の工夫 ・評価の工夫 ・T.T.による指導の工夫	・毛筆学習で学んだことを硬筆学習に生かすための工夫 ・発展学習の工夫 ・掲示方法の工夫

主題に迫るための指導の工夫

小学校４年・平仮名の筆使い　「とんぼ」	小学校５年・文字の大きさ　「登る」	中学校１年・漢字と仮名の調和の学習
		
・教材提示装置及び二色筆の使用 ・学習カード（とんぼカード） ・T.T.の活用（課題別グループを分担）	・すけーるシート ・学習カード（登る君カード） ・T.T.の活用（個に応じた指導）	・正方形の用紙（大小） ・学習形態の工夫（教材別グループ） ・T.T.の活用（教材別グループを分担）

研　究　授　業

Ⅲ 研究の内容

1　自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組むための工夫

○興味・関心を高める導入の工夫

・「とんぼ」の話をする、「登」の字源を示すなど教材への関心が高まるようにする。

・導入時に学習の見通しをもてるようにし、意欲を高めるようにする。

「登」の字源の例

○教材や基準を分かりやすく提示する工夫

・必ず筆順の確認を行う。

・教材提示装置を使って筆使いを示す。
（二色筆の使用）

・黒板に拡大文字を提示する。

・一人一人に「**すけーる**シート」を配布し、基準を確認しやすくする。

二色筆を使った指導

○課題に気付かせるための工夫

・試し書きと基準を比べ、試し書きに自分の課題を赤ペンで書き込んだり、シールを貼ったりする。

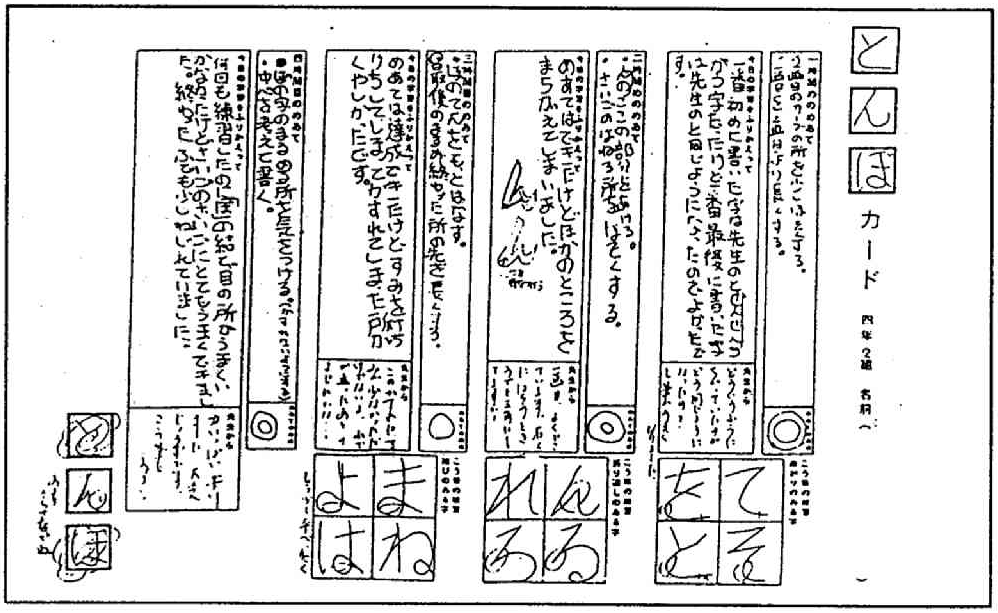
・「**すけーる**シート」を使って基準と比べ、自らの課題に気付く。
（「**すけーる**シート」の作り方→１㎝方眼をＢ４サイズのＯＨＰシートにコピーする。表は水性ペンで書き込みもできる。）

・用紙の大きさを変えることにより、課題に気付く。

○課題意識を高めるための工夫

・自分の課題に合った練習用紙を、自分で作成する。

・課題意識を高めるために、学習カードに自分の課題を記入する。



○評価の工夫

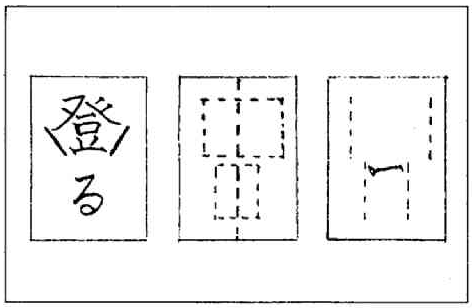
・同じ課題をもつグループ内で相互評価をする。

・学習カードに評価を記入する。（自己評価・先生からの評価や助言）

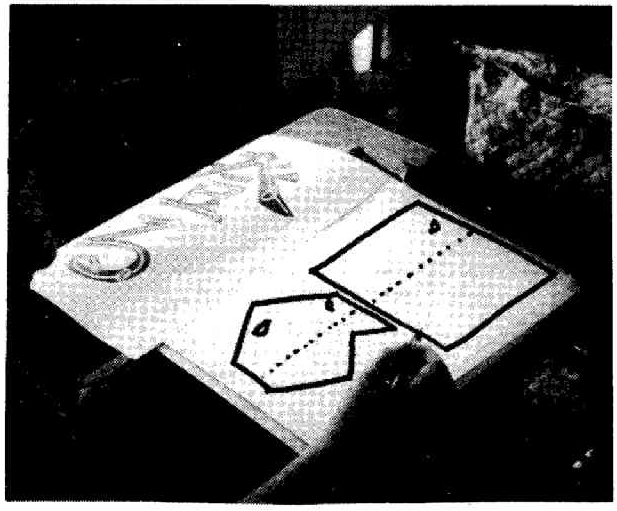
2　意欲的に取り組み、達成感・成就感を得るための工夫

○個々の課題に応じるための工夫

・筆使いの入った基準を配布したり、練習用紙の作成例を示したりして、自分の課題に合わせて自分で練習用紙を作成しながら練習できるようにする。



練習用紙の作成例



○指導計画の工夫

・２時間連続した授業、１単位時間の弾力的な運用など工夫し、達成感・成就感を得られるようにする。

・児童・生徒が見通しをもって取り組める学習計画を工夫する。

・児童・生徒にとって身近な教材を取り入れる。

○学習形態の工夫

・課題別グループで相互評価しやすいようにする。

・教材別グループで話し合いをしやすいようにする。

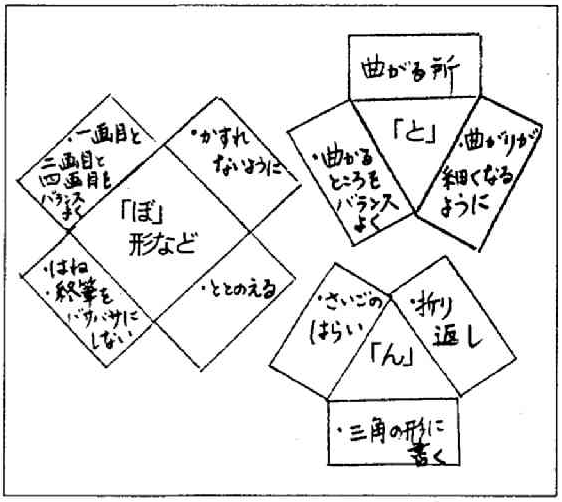
○評価の工夫

・評価は、作品に対する評価ではなく、課題に即した評価を行うことにより、達成感・成就感を得られるようにする。

・メッセージカード（友達の良いところを記入）の交換をする。

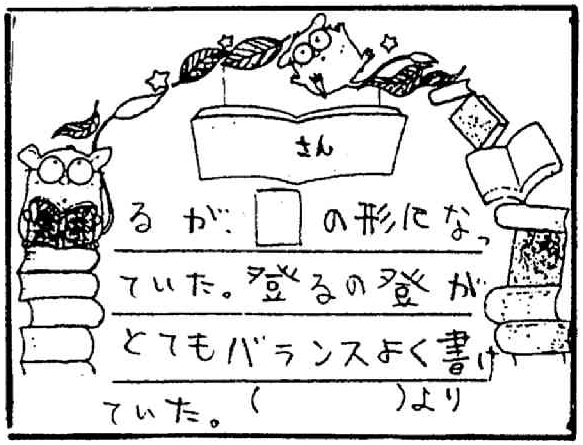
・教室掲示の工夫　①まとめ書きだけでなく試し書きも掲示し、変容が一目で分かるように配慮する。

②課題別に掲示し、課題が達成できたか分かるようにする。



課題別座席表の例

試し書きとまとめ書きの掲示の例



メッセージカードの例

課題別掲示の例

○　T.T.による指導の工夫

・個別指導の時間や機会を増やす。

・課題別グループを分担し、適切な助言・評価ができるようにする。

・役割を分担し、指導にあたる。

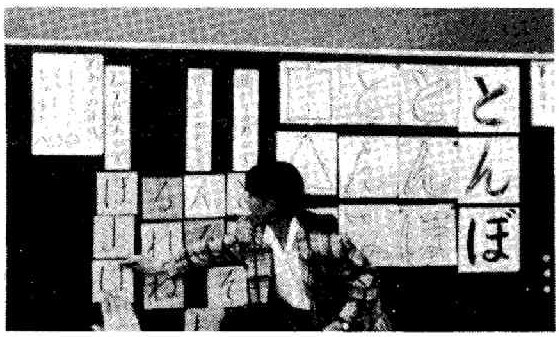
3　日常生活に生かすための工夫

○毛筆学習を硬筆学習に生かすための工夫

・学習したことが、日常生活に生かせるような学習カードを工夫する。

とんぼ →

と→曲がりのある字 ん→折り返しのある字 ぼ→結びのある字



登　る →

文字の大きさ （漢字と平仮名） 鳴く・歌う 漢字仮名交じり文

を硬筆で書き、他の文字にも生かせるようにする。

・記名に筆ペンを用い、日常的に使用できるようにする。

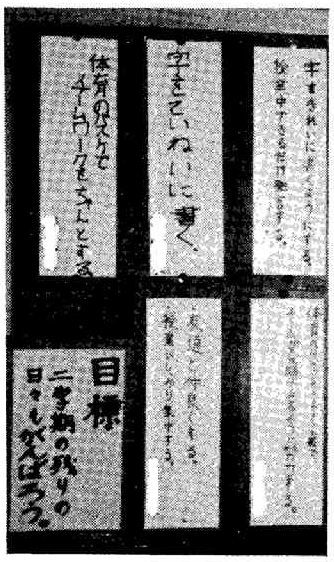
○掲示方法の工夫

・教室の文字環境を整え、文字に対する意欲を喚起する。

○発展学習の工夫

・日常生活の中で目に触れる明朝体・ゴシック体以外の文字を新聞から探しとり、文字に対する関心をさらに促す。

・書写で学んだことを他の学習や日常の文字に生かせるよう機会をとらえて継続的に指導する。



国語科書写　＜基礎的・基本的事項＞

○硬筆に関して　●毛筆に関して　・硬毛共通

	小学校						中学校
	低		中		高		
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
	・正しい字形・筆順						
基礎・基本（知識理解）	○点画の長短・方向 →	○点画の接し方，交わり方，方向	○文字の組み立て方 →	○文字の大きさ，配列（読みやすく書く） →	○字形，大きさ，配列 →（よしあしの判断）→	○字形，大きさ，配列 →（理解，実践）	○字形，大きさ，配列・配置（全体の調和）→（理解，実践）→
			●用具の扱い ＜準備，片付け＞				・目的や必要に応じて選ぶ →
			●筆使い ＜始筆，送筆，終筆＞ ＜点画の長短，方向＞		（正しい筆使いの定着）→		
				●点画の接し方，交わり方，方向 ●文字の中心，画間	●文字の組み立て方 ●文字の大きさ，字配り →		●行書についても同様 ＜筆の当て方，筆圧＞ →
姿勢	いすに浅く腰かける 背筋を伸ばす 両足をつける →		（正しい姿勢の実践）→				
	○正しい鉛筆の持ち方 →		●正しい筆の持ち方 →	（筆・鉛筆の持ち方の意識化）→			
	・机，イスの調節 →						
	・用具の置き方 →						
態度（意識構え）	・興味，関心をもつ →		課題をもって書く →				
	○用具を整える ＜鉛筆を削る＞ ＜硬筆用下敷の利用＞ →						
			●用具を整える ＜筆・硯の手入れ＞ →				
	・丁寧にゆっくりと書く →						・文字を正しく整えて速く書く ・文字感覚を養う ・文字を自ら進んで工夫して丁寧に書く ・書写の能力を生活に役立てる態度 →
			○毛筆学習の成果を硬筆に生かす →				

Ⅳ 実 践 事 例

＜小学校第４学年＞

1　単　元　名　　平仮名の筆使い　「とんぼ」

2　単元の目標

・平仮名の「曲がり」「結び」「折り返し」などの筆使いを理解して、丁寧に書くことができる。

・毛筆で学んだことを硬筆に発展させることができる。

・課題意識をもって、意欲的に取り組むことができる。

3　単元について

第４学年における書写学習は、文字の組み立て方、文字の大きさや配列に注意して書くとともに、点画の接し方、交わり方、方向に注意し、正しく書くことや、文字の中心、画と画との間隔に注意して形を整えて書くことの指導が重視される。その中で特に本単元は、平仮名の筆使いを学習することで、漢字との違いに気付き、文字を整えて書く技能・態度を高めることをねらいとする。平仮名の性格は毛筆の特性によって形成されてきたことから、硬筆よりも、毛筆で扱うことによってその特性が把握されやすい。

毛筆での平仮名の学習は、３年時に「つり」で学習した。比較的易しい文字で、「はらい」を学んだ。本単元では、字数は３文字になり、「曲がり」「折り返し」「結び」のあるやや難しい平仮名である。

本単元を通し、児童が自分の書いた文字から教材文字との比較により課題を自ら発見し、自分のめあてにあった練習ができるようにさせていきたい。そのために、学習カードを用いながら、個々のめあてをもち、それを確認し、自己評価や児童間での批正及び評価ができるような指導の工夫をした。

4　研究主題との関連

(1)　自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組むための工夫

①　興味・関心を高める導入の工夫

・本物のとんぼを見せたり、とんぼに関連した詩の暗記を取り入れ、教材を身近に感じられるようにする。

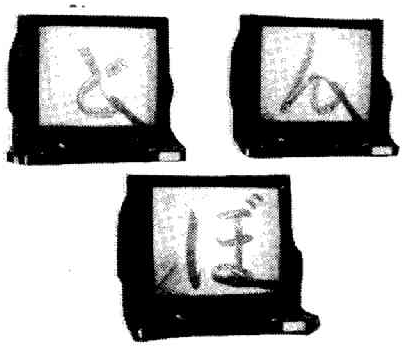
②　教材や基準をわかりやすく提示する工夫

・教材提示装置や拡大文字、二色筆などを使って、筆使いがよく分かるようにする。

③　課題に気付かせるための工夫

・基準を書き込んだ教材文字と試し書きとを比較し、赤ペンで気付いたことを書き込むことにより、課題をはっきりつかめるようにする。

・平仮名の字形をとらえやすくするため、練習用紙を正方形にし、まとめ書きは３文字が縦で並ぶ長方形の用紙にする。



教材提示装置・二色筆

④　課題意識を高めるための工夫

・児童自身で練習用紙を作成するために、作り方の例を示し、児童が作りやすいようにする。

⑤　評価の工夫

・まとめ書きに評価シールを貼り、自分の課題を振り返り、自己評価できるようにする。

・児童自身の言葉で自分の課題が書けるような学習カード（とんぼカード）を工夫する。

⑵　意欲的に取り組み、達成感・成就感を得るための工夫

①　個々の課題に応じた練習用紙の工夫

・自分の課題に合った練習用紙を児童自身で作成させ、意欲的に取り組めるようにする。

②　指導計画の工夫

・第１時は課題を二つ作るので６０分扱いにする。

③　学習形態の工夫

・前時に作った課題を基に、課題別のグループを作り、相互評価などに役立つようにする。

・児童の机の配置を工夫し、児童相互で学習の状況が見合える場を作る。

④　評価の工夫

・作品に対する評価でなく、自分の課題に対する評価となるような学習カード（とんぼカード）にする。

・学習カード（とんぼカード）は課題から評価まで一貫して書ける形にする。

・試し書きとまとめ書きとの比較をシールを使うことにより達成感・成就感の喜びを味わえるようにする。

⑤　T.T.による指導の工夫

・課題別グループを分担して担当することにより、個別指導の時間や機会を増やす。

・個別に声掛けすることにより課題に対する評価に役立てる。

⑶　日常生活に生かすための工夫

①　毛筆学習を硬筆学習に生かすための工夫

・毛筆で学習したことを、その時間内で硬筆に生かせるような学習カード（とんぼカード）の工夫をする。

②　掲示方法の工夫

・文字環境を整え、文字に対する意欲を喚起するために、前時に書いたものと本時に書いたものとを比較して見ることができ、成果が明らかになるような掲示をする。

T.T.による指導

比較できる教室掲示の工夫

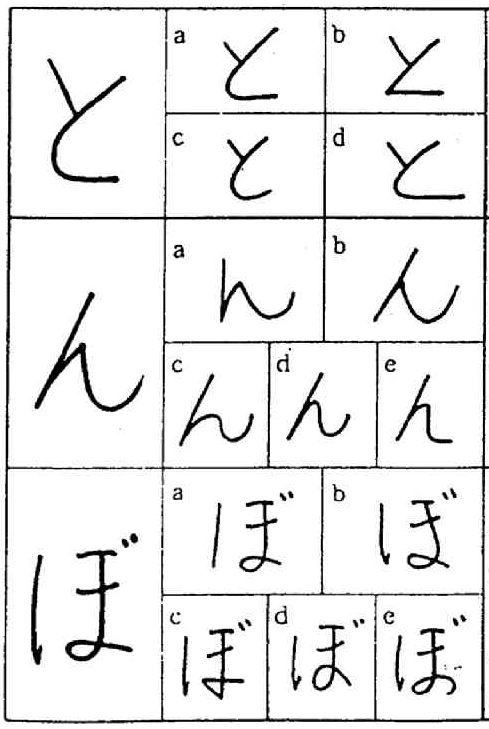
5　児童の実態

書写の時間は、丁寧に書くという意識はもっているが、普段ノートに書く時は、雑になったり、癖のある字になったりしがちである。２３名中、鉛筆の持ち方がほとんどできていない児童は５名、親指の位置や鉛筆の傾く方向などに課題のある児童は３名である。

『試し書き→教材文字との比較→自分のめあての確認→練習→まとめ書き→自己・相互批正の学習』のパターンを１学期に繰り返してきた。試し書きと教材文字とを比較し、自分の課題が見つけられるようになってきている。

本単元に入る前に、普段の授業時に児童の書いている文字の特徴を課題文字の「と」「ん」「ぼ」で調べてみた。その結果は、以下の通りである。

《文字例》



＊	だいたいできている・・・・・・・・・・・・ ２人
a	２画目の始筆が１画目より上の位置から入る ８人
b	曲がりが滑らかでなく、角張っている・・・ ２人
c	２画目の終筆が止まっていない・・・・・・ ４人
d	２画目の終筆が始筆より長い・・・・・・ ２０人
＊	だいたいできている・・・・・・・・・・・・ ２人
a	始筆の入る位置が左よりになっている・・・ ６人
b	折り返し一つ目が全くくっついている・・ １０人
c	折り返し二つ目が丸くなる・・・・・・・ １０人
d	終筆のはらいを止める・・・・・・・・・・ ３人
e	終筆のはらう方向が違う・・・・・・・・・ ６人
＊	だいたいできている・・・・・・・・・・・・ １人
a	１画目のはねがない・・・・・・・・・・ １５人
b	４画目の縦線がそりすぎ・・・・・・・・・ ７人
c	結びの形が三角になっている・・・・・・・ ６人
d	結びが大きい丸になっている・・・・・・・ ５人
e	４画目の終筆が止まっていない・・・・・・ ２人

6　指導計画（４$\frac{1}{3}$時間扱い）

第１時……平仮名の「曲がり」「折り返し」「結び」などの筆使いについて学習
（１$\frac{1}{3}$時間扱い）　することを知り、“と”の「曲がり」の筆使いに気を付けて書く。
第２時……“ん”の「折り返し」の筆使いに気を付けて書く。
第３時……“ぼ”の「結び」の筆使いに気を付けて書く。
第４時……自分の課題をもって、「とんぼ」のまとめ書きをする。（本時）

※$\frac{2}{3}$時間は、次単元で調整。

7　本時の指導（４$\frac{1}{3}$時間扱いの第４時）

(1)　目　標

・前時で立てた課題に合わせて、自分で練習用紙を作ることができる。
・作った練習用紙で、「曲がり」「折り返し」「結び」の筆使いの練習をすることができる。
・毛筆で学習したことを硬筆に生かすことができる。

(2) 展　開

学習活動	教師の支援		主題に迫るための手立て
	T_1	T_2	
1．学習のねらいを知る。	・「曲がり」「折り返し」「結び」を生かしてまとめ書きをする学習であることを知らせる。		T.T.による指導
「曲がり」「折り返し」「結び」の学習を生かして書こう			
2．前時で立てた「とんぼ」のめあてを確認する。	・各自のめあてを振り返らせ、めあてごとの座席であることを確認する。		とんぼカード（めあて）
3．ウォーミングアップをする。	・「とんぼ」の空書きを児童と共にする。（掌で）	・「曲がり」「折り返し」「結び」の筆使いを確認し示範する。	教材提示装置 二色筆
4．各自の課題を基に練習用紙を作成し、「とんぼ」を練習する。 	・練習用紙の作成例を示し使い方を説明する。 **・各自の課題にあった練習用紙を作り、練習をさせる。** **・T_1、T_2により、課題に合った練習用紙作りができているか確認し、助言する。** **・筆使い、姿勢について、個別指導する。** **・意欲、関心、態度の評価をする。** ・主にA、B、Cグループに助言する。	・練習用紙の作成例を貼っていく。 ・主にD、E、Fグループに助言する。	既習の練習用紙の作例例 用紙（15×45）
課題別グループ	A「ぼ」の形など B「ぼ」の結び C「と」	D全部の字（形、止め） E「ん」とバランス・中心 F「ん」	
5．まとめ書きをする。	・今まで学習したことを生かすように助言する。 **・担当のグループについて個別指導する。**		
めあてができたか調べよう			相互評価 自己評価 とんぼカード（評価・感想）
6．前時に書いた「とんぼ」と比べて自分の課題が達成できたか調べ、評価と感想を書く。	・前時に書いたまとめ書きと本時に書いたまとめ書きをグループで共同批正させる。 ・自分のめあてができたか確かめるように助言する。 **・自分の言葉で書くように助言する。**		

7．成果を発表する。	・めあての達成の著しい児童の試し書きとまとめ書きとを比べてみせる。 ・各グループごとに作品を発表させる。		
8．今まで学んだことを生かして硬筆で書く。	・とんぼカードに「とんぼ」を硬筆で書かせる。 ・姿勢、鉛筆の持ち方、毛筆で学習したことなどを個別指導する。 ・学習したことを日常生活に生かす大切さを話す。	・硬筆の平仮名カードを提示する。	とんぼカード（硬筆のまとめ書き）

(3) 評　価

・自分の課題に合った練習用紙が作れたか。

・自分の課題を基に「曲がり」「折り返し」「結び」の筆使いができたか。

・毛筆で学習したことを硬筆に生かせたか。

8　考　察

(1) 自分の課題に気付き、自ら課題をもって学習に取り組むために

基準を書き込んだ教材文字と試し書きとを比較し、赤ペンで自ら気付いたことを記入することによって、児童一人一人が意欲的に課題をもって学習に取り組むことができた。また、字形だけでなく、始筆や終筆なども意識して書いていた。しかし、各自の課題に合った練習用紙を作ることが難しく、教師の助言が必要な児童も見られた。今後はよりきめこまやかな助言を工夫し、自らの課題にそって作れるように指導していく必要がある。

二色筆を使って教材提示装置で見せた筆使いは具体的で、児童が興味をもち、分かりやすかった。正方形の練習用紙は児童にとって取り扱いやすく、平仮名をとらえやすくした。

(2) 意欲的に取り組み、達成感・成就感を得るために

課題別グループでの学習は練習用紙作りや相互評価などを通して課題意識を互いに高めることができ、有効だった。また、机の位置を工夫したことも効果的であった。しかし、課題別グループは、集中力の持続や教室の広さなどの問題もあり、効果的に取り入れる工夫をしていく必要がある。

第１時では２つの課題を決めるため、60分扱いにしたことで児童がゆとりをもって、意欲的に取り組むことができた。

学習カードを使った取り組みは児童自身が文字の変容に驚き、達成感を得られる学習となった。しかし、記入に時間がかかるという課題が残っている。

T.T.はT_1、T_2ともに役割分担を決めて指導にあたった。課題別グループを分担して個別指導した。一人一人へ声を掛けたり、手を添えて運筆を指導する機会が増え、児童の課題にそった指導ができ、児童の成就感へつながった。

(3) 日常生活に生かすために

学習カードで硬毛の関連を図ったことは、書写の学習で習ったことを日常生活に生かすことができるという自信につながった。掲示方法を毎時間の成果が分かるようにしたことや学習カードへの教師の助言は、児童の励みになり、日常の文字の変容へつながった。この意欲を今後も持続する指導を工夫していきたい。

＜小学校第５学年＞

1　単　元　名　　文字の大きさ　　（漢字と平仮名）　　「登る」

2　単元の目標

・漢字と平仮名との大きさに注意し、正しく字形を整えて書くことができる。

・それぞれの文字の大きさを考えて、見やすく読みやすい言葉や文を書くことができる。

3　単元について

児童は「文字の大きさ」について、４年生の学習で「平仮名は漢字より少し小さめに書こう」という目標で学んできている。それらを基にして、ここでは、漢字と平仮名の大きさの均衡について学習する。また、文字の大きさについてだけでなく、見やすく読みやすい表現には、毛筆の場合には、点画の太さも関係していることにも気付かせる。

そこで、毛筆を使用して、漢字は平仮名より大きめに書くことと共に、画数の多い文字は細めに書くこと・画数の少ない文字は少し太めにすると形が整い、バランスがよいことなどについて児童の理解を促したいと考える。そして、毛筆で学習したことを生かし、縦書きや横書きなどの硬筆の学習を通して確かめをすることにより、文字の大小・全体の構成・行の中心などの基礎的・基本的内容を定着させたいと考え、本単元を設定した。

4　研究主題との関連

(1)　自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組むための工夫

①　興味・関心を高める導入の工夫

・「登」の字源を示し、教材への関心が高まるようにする。

②　教材や基準を分かりやすく提示する工夫

・拡大文字を提示する。

・確認しやすいように一人一人に「**すけーる**シート」を配布する。

③　課題に気付かせるための工夫

・教材文字と自分の試し書きとを比較して、気付いたことを赤ペンで書き込むようにする。

・「**すけーる**シート」を使って基準と比べ、自らの課題に気付く。

・自分の課題を学習カードに記入することにより、その課題をより明確にする。

④　課題意識を高めるための工夫

・児童自身で練習用紙を作成する。

⑤　評価の工夫

・自分自身の言葉で自分の課題に対しての評価を記入できるような学習カードを工夫する。

(2)　意欲的に取り組み、達成感・成就感を得るための工夫

①　個々の課題に応じるための工夫

・自分の課題に合った練習用紙を児童自身に作成させ、練習させることで意欲的に取り組めるようにする。

②　指導計画の工夫

・学習を中断させないために、２時間連続した授業を行う。

③　評価の工夫

・作品に対してではなく、自分の課題に即した評価となるような学習カード（登る君カード）にする。

・友達の作品の良いところについて書いたメッセージカードの交換を行い、お互いの良さを認め合えるようにする。

④　T.T.による指導の工夫

・T.T.による指導を行い、個に応じた適切な助言・評価ができるようにする。

・児童の要求にこたえられるようにする。

(3)　日常生活に生かすための工夫

①　毛筆学習を硬筆学習に生かすための工夫

・毛筆で学習したことを硬筆に生かせるように、教材を日常生活の中から取り上げていく。（生活目標を書く。）

②　掲示方法の工夫

・文字環境を整え、文字に対する意欲を喚起するために、試し書きとまとめ書きとを比較して見ることができ、成果を認め合えるような掲示をする。

5　児童の実態

漢字テストや作文を書くとき、「一画一画丁寧に。」という声掛けがあると、正しく丁寧に書こうとするが、日常の文字については、あまり意識されていない。

文字を書くことを楽しいと感じている児童もいるが、苦手意識をもっている児童も多い。練習の成果を少しずつでも認めていくことで、書くことへの意欲を高めていきたいと考えている。

漢字と平仮名との大きさについては、『書く』などのように漢字と送り仮名の文字を書くときは、やや漢字を大きく書くことができる。しかし、文章を書くときは、画数の多い漢字を書くとき文字は大きくなりがちであるが、全体的に見ると、平仮名の方が大きくなったり、すべて同じ大きさであったり、大きさのバランスに留意しながら文字を書く児童はあまりいない。

また、文字や行の中心を考えて文字や文章を書くことについては、半数以上の児童が意識しているが、文字と文字との間隔にまで気を配れる児童は多くはない。本単元を通して一文字一文字を正しく書くことだけでなく、見やすく読みやすく書くために、文字の大小、中心、間隔などに注意して書こうとする態度も育てることが必要である。

6　指導計画（4時間扱い）

第1・2時　漢字と平仮名との大きさに注意して『登る』を整えて書く。（2時間）
（本時）

第3時　硬筆で文字相互の大きさの比率に気を付けて、読みやすく『登る』『歌う』『鳴く』を書く。

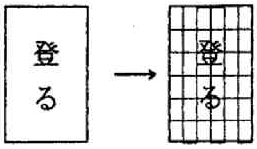
第4時　学習のまとめとして、硬筆で各自の生活目標を書く。

7　本時の指導（4時間扱いの第1・2時）

(1)　目　標

・「登る」の文字の大きさに関しての自分の課題を見つけることができる。
・「登る」を漢字と平仮名との大きさに注意して書くことができる。
・練習用紙を工夫し、進んで練習をすることができる。

(2) 展開

学習活動	教師の支援		主題に迫るための手立て
	T_1	T_2	
1．「登る」という文字を書くことを知る。	・児童の関心が高まるように、「登」の字源を提示する。		T.T.による指導
2．「登る」を空書きする。	・筆順の確認をする。	・はつがしらの筆順を板書する。	
3．硬筆と毛筆とで試し書きをする。	**・筆の持ち方・姿勢などについても助言する。** **・筆順の分からない児童に声掛けをする。**		
4．自己批正をする。赤ペンで直しをする。		・教材文字を配布する。	基準などの記入のない教材文字
「**すけーる**シート」を操作しながら基準について考える。 	**・良い点を見つけてほめる。** ・漢字と平仮名との大きさの違いに気付くようにシートを操作するよう助言する。	・「**すけーる**シート」を配布する。 	「**すけーる**シート」
5．基準について知る。自己批正して分かったことを発表する。	基準 ①縦の長さは、ほとんど同じ。 ②横幅は、「る」がせまい。 ・画数の多い文字はやや細めに書くこと、「る」の幅は「登」の１２画めの長さとほぼ同じにすること、平仮名は丸みのある線にすることも指導する。	・確認した基準を提示する。	拡大文字

自分のめあてをつくろう

6．学習カードに自分の課題を記入する。	・課題を考えられない児童には、机間指導の際助言する。		学習カード（登る君カード）
7．練習用紙を作成しながら練習する。		・教材文字を配布する。	基準などを記入した教材文字
	・課題に合った練習用紙を作成できない児童に助言する。		個々に作成する練習用紙 練習用紙の作成例
8．まとめ書きをする。	・漢字と平仮名との大きさに気を付けながら丁寧に書くように声掛けをする。	・用紙の足りない児童に用紙を配布する。	
9．自己評価する。 成果を発表し合う。	・自信のもてない児童には、教師が評価し認める。 ・自分の成果だけでなく、友達の成果も見つけることのできた児童を評価する。		学習カード（登る君カード）
10．次時の学習内容を知る。	・次の時間は、硬筆で『登る』や『歌う』『鳴く』などを書くことを伝える。		

(3) 評　価

・漢字と平仮名の大きさに注意して書くことができたか。

・自分の課題をもち、意欲的に学習することができたか。

8　考　察

(1) **自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組むために**

教材文字と自分の試し書きとを比較し、赤ペンで書き込みをすることにより、児童一人一人が、自分の文字について課題となる点に気付きやすくなった。

基準を発見し、確認しやすくするために、一人一人に「**すけーる**シート」を配布したが、シートの操作に慣れず、戸惑っていた児童もいた。基準について全体で確認した際、再度全員でシートを使って確かめる必要があった。今後も学習の中で、シートを活用していきたいと考える。

学習カードに児童自身の言葉で自分の課題を書き込むことにより、個々の課題に応じためあてをより明確にすることができた。

練習用紙は児童一人一人が工夫しながら作成していたが、めあてに合った練習用紙を作ることが難しい児童や、１枚の練習用紙を作るのに時間がかかってしまう児童もいた。練習用紙の作成例は提示したが、更に、机間指導の際に、個別に助言することが必要であると考える。

(2) 意欲的に取り組み、達成感・成就感を得るために

練習用紙は規定の与えられたものでなく、各自がめあてに応じて工夫しながら作成したものを使用することにより、意欲的に取り組めた。

意欲の持続を考え2時間連続した指導を行った。「**すけーる**シート」の操作や、自己批正を通して、基準を理解したり、自分の課題に気付いたりするまでの時間をより多く確保するなど、時間配分の工夫をすることで、学習に対しての意欲も一層高めることができたのではないかと考える。

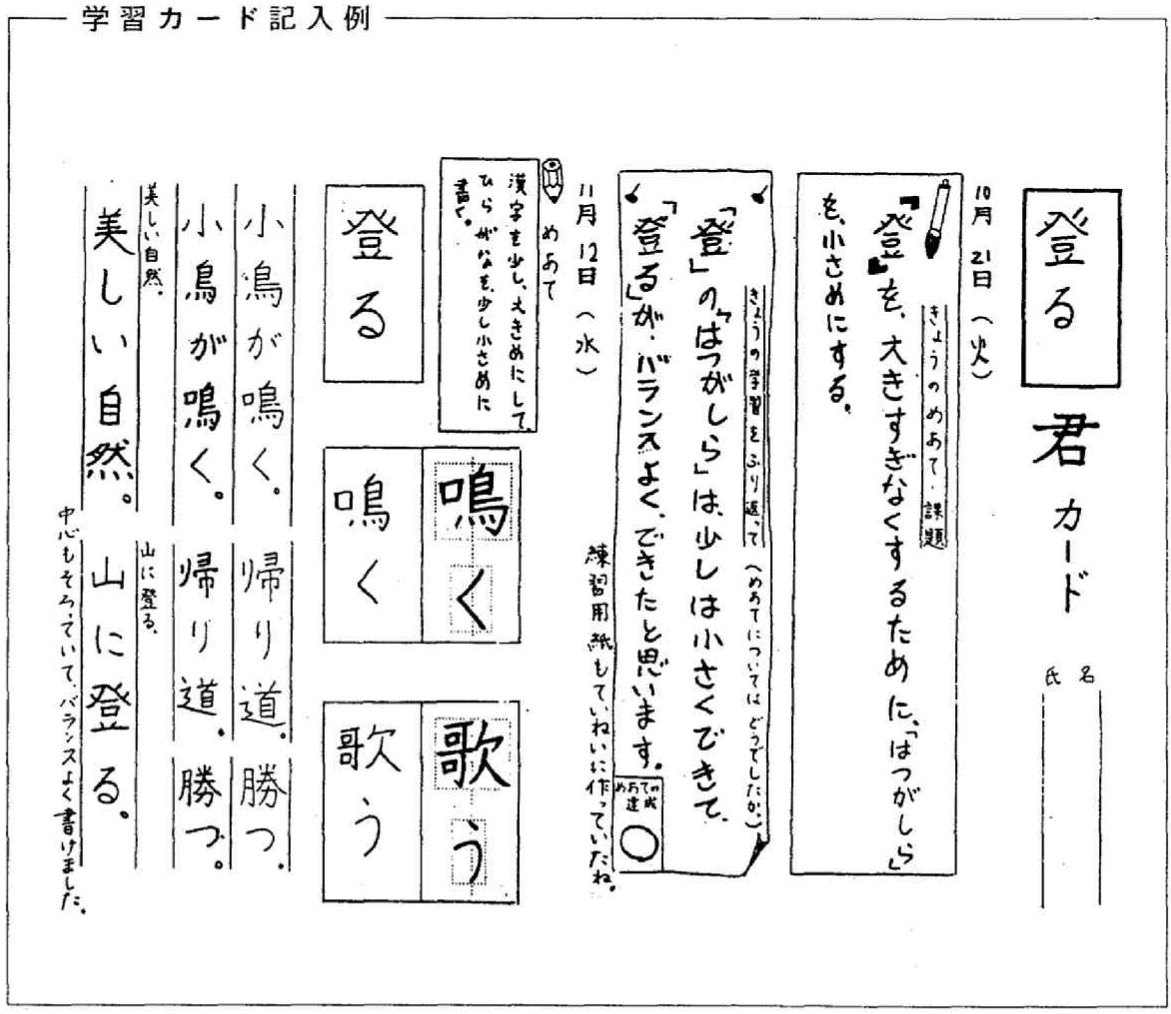
T.T.による指導を行ったことで児童の要求にこたえやすかった。更に個別指導の際T_1・T_2の役割分担を明確にしておくと、より適切に指導を行うことができたものと考える。

(3) 日常生活に生かすために

試し書きとまとめ書きを対にして掲示することにより、児童が、お互いに学習の成果を認め合い、評価し合うことができた。

学習のまとめとして、生活目標を書いたことにより、学習したことを日常に生かすことができた。

学習カード記入例



＜中学校第１学年＞

1　単　元　名　　漢字と仮名の調和の学習

教材は次の６種の課題の中から自由選択する。

「強い心」「正しい字」「考える力」

「大きな声」「小さな一歩」「未来を語る」

2　単元の目標

・楷書の筆使いや字形の整え方を理解し、確実な筆使いで伸び伸びと書くことができる。

・文字の組み立てを理解し、調和のための工夫ができる。

・漢字と仮名との調和を意識しながら、個々の文字を丁寧に書くことができる。

・学習成果を、硬筆での書写に活用することができる。

3　単元について

日常生活に用いられる文章は、平仮名が約７０％を占める漢字仮名交じり文である。ここでは、その漢字と仮名とを調和して書くことで、読みやすく、整った作品になることを意識させ、それを日常生活に応用できるようにするため、本単元を設定した。

4　研究主題との関連

(1)　自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組むための工夫

①　興味・関心を高める導入の工夫

・国語の授業で作成した学習標語をより良い展示作品に仕上げるという目標をもち、意欲を高めるようにする。

・６種類ではあるが、自分の好きな課題を選ぶことで、興味を感じるようにする。

②　課題に気付かせるための工夫

・用紙の大きさを変えることにより、文字の大きさが画一でないほうが全体のバランスが良くなることに気付きやすくする。

③　評価の工夫

・まとめ書きに評価カードを貼り、自分の課題を振り返らせ、自己評価するようにする。

(2)　意欲的に取り組み、達成感・成就感を得るための工夫

①　指導計画の工夫

・身近な教材を取り入れる。

②　学習形態の工夫

・教材別にグループを作り、相互評価に役立つようにする。

③　評価の工夫

・本時では、調和について気付くことを評価の規準として重視する。

・本時学習後、展示作品を再度書いてみて、２枚の作品を比較することにより、課題を達成した喜びを味わえるようにする。

④　T.T.による指導の工夫

・グループを分担して担当することにより、個別指導の時間や機会を増やす。

・個別に声掛けすることにより、生徒の要求にこたえることができるようにする。

(3)　日常に生かすための工夫

① 毛筆と硬筆の関連

・毛筆で学習したことを硬筆で生かせるという、見通しをもって学べるような課題を設定する。

② 掲示方法の工夫

・文字環境を整え、文字に対しての意識を高めるため、生徒の手による生徒作品を機会をとらえてたくさん掲示する。

5 生徒の実態

4月の最初の授業で、中学校での書写学習を始めるに当たっての意気込みを確かめたところ、「もっと上手に書けるようになりたい。」と書いた生徒が多かった。しかし、そう書いてある文字には、丁寧な、整ったものも見られ、より良い文字を書きたいと願う向上意欲を感じさせる。中には「最後まで投げ出さないようにする。」「一文字ずつ丁寧に書く。」「その漢字の意味を考え、心を込めて書く。」という言葉もあった。一方で、「下手だから、書くのは嫌い。」という気持ちを払拭できずにいる生徒もわずかながらいる。このような生徒の学習意欲を喚起しようと、目標を絞って基本点画の再確認などをしてきた。

ほとんどの生徒が書写の授業作品については、一生懸命、丁寧に書く努力をしている。しかし、掲示物やノートなどの日常の書写活動に生かされている者は多くない。

6 指導計画（3時間扱い）

第1時……文字の大小によって紙面上に調和が保たれていることに気付き、作品としてのバランスを工夫しながら練習をする。（本時）

第2時……前時の学習から自分の課題をつかみ、さらに調和の観点を意識しながら努力目標を設定し、まとめ書きをする。

第3時……漢字と仮名の調和を意識しながら、硬筆で楷書のまとめをする。自作の学習標語（国語の授業で考えたもの）を作品として仕上げる。

7 本時の指導（3時間扱いの第1時）

(1) 目 標

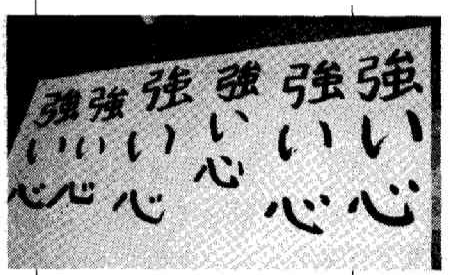
・日常生活に用いられる文章は、ほとんど漢字仮名交じり文によって書かれていることを確認し、それらを同一紙面上に調和させて書こうとする。

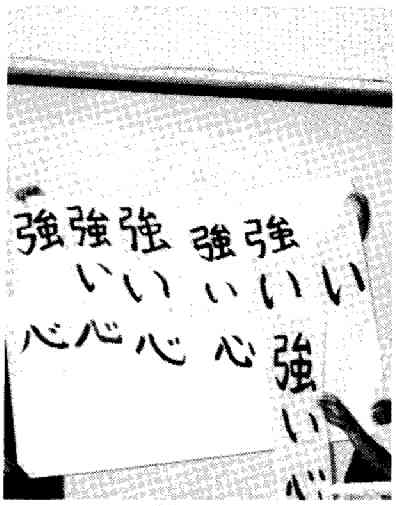
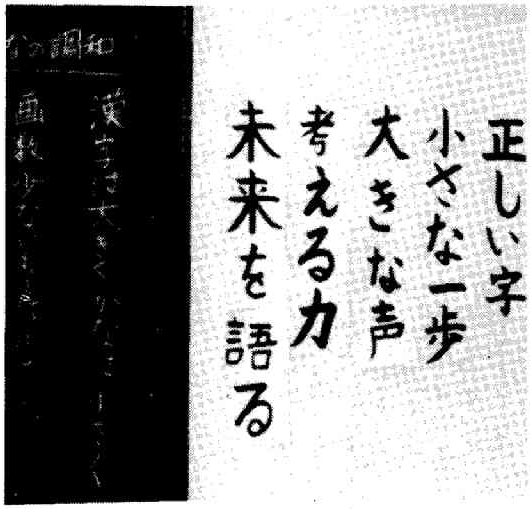
・漢字と仮名の違いによる大小のみならず、画数や字形構成による大きさの違いも考えながら全体を調和させて書くことができる。

(2) 展 開

学習活動	教師の支援		主題に迫るための手立て
	T_1	T_2 T_3	
1．学習のねらいを知る。	・国語の授業で作成した学習標語の掲示物を、より良い作品にするための方法を考える学習をする、ということを知らせ	・いくつかの作品例を提示する。	T.T.による指導

	る。		
2．前時までの学習を振り返る。	・同じ大きさの用紙に書かれたものでも、読みやすく、整ったものと、そうではないものとがある理由を考えさせる。		
3．各々の課題で試し書きをする。	・教材別の座席であることを確認する。		教材別の座席
	・用紙を配布する。（用紙は一文字ずつ書くようにした、大小2種類の正方形で、班員の半数には大きい用紙、残りの半数には小さい用紙が渡るように配慮する。）		用紙
	・書くことへの抵抗をなくすような、声掛けをする。		
		・床に模造紙を用意する。	
4．試し書きを基にしてグループごとに話し合う。	・最も読みやすく、整った文字の組み合わせとなるように、一字ずつを選出し、選んだ理由を説明してもらうことを伝える。		
	・模造紙の上に、グループの作品を並べさせる。		
	・班員の作品を見比べて各々の一文字ずつを用いながら、話し合ってバランスの良い作品を選び出すよう助言する。		



	・担当の班をまわりながら、調和のとれている代表作品が選ばれているか確認し、必要に応じて助言する。 ・意欲、関心、態度の評価をする。	
5．グループごとに代表者が発表する。 6．各班で選んだものを共同批正する。	1　漢字は大きく、仮名は小さく。 2　画数の多いものは大きく、少ないものは小さく。 3　字形の構成	相互評価
	 	
7．各自が学んだことを基にして、自分の教材文字のまとめ書きをする。 8．学習成果を自己評価する。 9．次時の課題を考える。	・同一紙面上に書いてみて、調和を実感できるようにする。 ・文字のバランス、字間なども考えて、調和のとれた作品となるよう助言する。 ・自分の言葉で書けるように助言する。 ・作品全体として見た時の、文字の調和について意識をもてるようにする。	自己評価

(3)　本時の評価

・文字の組み立てを理解し、調和のための工夫点を考えたか。

・漢字と仮名との調和を意識しながら、個々の文字を丁寧に書けたか。

・硬筆での書写活動に生かそうという意欲が出たか。

8　考　察

(1)　自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組むために

事前に廊下に展示してあった、国語の授業で作成した自作の学習標語を導入とし、作品を具体的に示したので、課題を身近に感じさせることができた。

また、「より良い作品に書き直す」という学習の意味を明らかにし、見通しをもったために、課題意識は予想以上に高まった。

事前の授業で、文字数の少ない課題文字（６種類に限定）の中から、好きな言葉や書けそうな言葉を選択したので、積極的に取り組んでいた。

用紙の大きさを変えたり、一枚に一文字ずつ書き、操作しやすくしたことは、調和を確認するのに役立った。

(2) 意欲的に取り組み、達成感・成就感を得るために

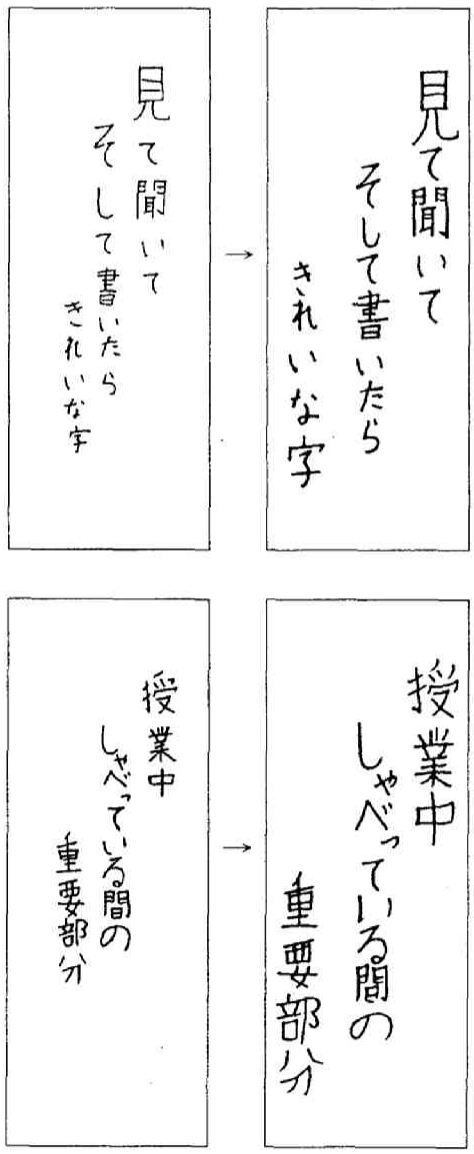
第３時に、今回学んだことを基にして自作の学習標語を書き直してみた。そのほとんどが右のように、大きさ、バランス、字間など整った作品となり「読みやすくなった。」「整った作品になった。」と満足していた。

また、自分の書いた作品が、みんなに注目を喚起するように教室や廊下の掲示板に展示されているのは、自信につながり、次回への意欲を高めるものとなっている。

３人のT.T.を試みたことは、生徒の要求にこたえられ効果的だった。また、課題に気付くまでの話合いが十分に行えた。生徒の感想は「たくさんの先生がいたので、いろいろなことを教えてもらうことができた。」「いろいろな先生の意見を聞いて、考えることができ、楽しかった。」「たくさんのアドバイスをもらった。」などとあり、満足感が得られる授業となった。

(3) 日常生活に生かすために

日頃から、正しい文字や整った文字への意識を高めていくためには、週番活動の週目標を書いたり、人権週間の際に作成した人権標語を展示発表したりと、機会をとらえて文字作品の展示をし、文字環境を整えていく必要がある。



一作目　　二作目

Ⅴ 研究のまとめと今後の課題

今年度は、「基礎・基本を身に付け活用できる書写指導の工夫」というテーマで、研究を進めてきた。視点を、①自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組むための工夫 ②意欲的に取り組み、達成感・成就感を得るための工夫 ③日常生活に生かすための工夫の3点にしぼり、主題に迫るべく授業研究を中心に研究を深めてきた結果、以下のことが成果として得られた。

1 児童・生徒一人一人が自分の課題に気付き、課題意識をもって学習に取り組むようになった。

(1) 教材提示装置や拡大文字などを使って筆使いを示すことによって、文字の基準が明確になり、各自が教材文字のイメージをもつことができた。

(2) 試し書きの文字と基準を書き込んだ教材文字とを比較できる教具を用いることにより自分の課題がはっきりつかめた。

(3) 自己の課題を書き込んだり、振り返ることのできる学習カードを工夫することにより課題に即した自己評価ができるようになった。

(4) 児童自ら練習用紙を作ることで、自分の課題に合った練習を進めることができた。

2 達成感・成就感を得るための工夫をすることにより、学習に意欲的に取り組めるようになった。

(1) 自分の課題に合った練習をすることで、文字に変容がみられ、成就感を得ることができたので、意欲的に取り組むという相乗効果が期待できた。

(2) 課題別グループを編成し、相互に評価できるような学習形態をとることにより意欲的に取り組めることがわかった。

(3) 試し書きとまとめ書きとの比較により課題を達成した喜びを味わうことができた。

(4) T.T.による指導は、個に応じた適切な助言・評価の機会を多くとることができ、児童の意欲付けにもなった。

3 文字に対する意識が高まれば日常生活に生かそうとする姿勢が表れることがわかった。

(1) 毛筆学習を硬筆学習に生かすための学習カードを工夫することにより、学習した文字を日常書く文字に応用できるようになった。

(2) 学習の成果が分かるように試し書きとまとめ書きとを並べて掲示するなど、文字環境を整えることで、文字に対する意識が高まった。

今後の課題としては次のことが考えられる。

1 児童・生徒が楽しみながら自己課題を解決できるような指導法を開発したり、教具を工夫したりしていくこと。

2 児童・生徒が伸び伸びと自己表現ができるように机の大きさ、人数に見合った教室の広さ等を考慮し、多目的ホールや余裕教室の活用を図ること。

3 楽しく文字を書きたい、字形の整った文字を書きたいという児童・生徒の願いを実現するため、日常の言語活動に生きる書写指導の研究を継続すること。